平成 28 年 12 月 27 日　第 2506 号

営農NEWS

トマト灰色かび病の発生に十分注意しましょう

越冬トマト栽培では、この冬の不安定な天候で、施設内の環境制御や肥培管理に苦労されていると思います。
この影響で、発病時期が前進化している灰色かび病が発生しており、十分な注意が必要です。
灰色かび病はやや低温を好み、多湿の環境が続けば多発生し、一度多発生してしまうとなかなか薬剤による防除効果が上がりにくい病害です。
「病害虫発生予報 1 月号（病害虫防除所）」によりますと、12 月中旬現在、促成トマト灰色かび病の発病株率は平年よりやや高く（本年値 0.9%、平年値 0.4%）、発病地点率もやや高い（本年値 11%、平年値 6%）状況で、向こう 1 ヵ月の発生量は平年並～やや多いと予想しています。
今後、灰色かび病の予防に努めるとともに、施設内をよく観察し、発病の早期発見に努め、発病初期の防除を徹底してください。なお、**有効な薬剤に対して耐性菌が出現しやすい病害**で、**常に防除効果を確認しながら系統の異なる薬剤で防除を行う**必要があります。
このため、下記の防除のポイントを参考にして発病抑制の栽培環境を保持し、的確な防除を実施して、高品質で安定した収量確保を図ってください。

＜防除のポイント＞

1）トマトの健全な生育を促すため、適宜な整枝、剪定による採光や通風の確保、適度な灌水や追肥など、適切な肥培管理に努めてください。
2）花弁の花落ちが悪いと、果実灰色かび病の発生を助長しますので、出来るだけ枯花を取り除きましょう。
3）施設内の多湿条件が続くと、急速に灰色かび病が発生します。昼近くになっても、作物に水滴が残るような場合には、暖房や送風、換気等により施設内の湿度をできるだけ低くするよう努めてください。
4）被害果などを見つけたら直ちに摘除し、施設外へ持ち出して腐熟化させるなど適切に処分してください。施設内や近くに、そのまま放置することは（伝染源となる恐れがありますので）厳禁です。
5）薬剤防除は予防または発病初期から行い、晴れた日の午前中に散布して、夕方までには薬液が乾くようにします。
6）湿度の高い施設では、防除薬剤に「くん煙剤」なども活用しましょう。
7）薬剤耐性菌の出現を抑制するため、同一系統の連続使用は避けてローテーション散布してください。

表１　トマトまたはミニトマト灰色かび病の主な防除薬剤（平成 28 年 12 月 26 日現在）

薬剤名　（系統名）	トマト	ミニトマト	希釈倍率	使用時期　／使用回数
ファンタジスタ顆粒水和剤（ QoI ）	○	○	2,000～3,000 倍	収穫前日まで／ 3 回以内
アフェットフロアブル（ アニライド）	○	○	2,000 倍	収穫前日まで／ 3 回以内
セイビアーフロアブル20（フェニルピロール）	○	○	1,000～1,500 倍	収穫前日まで／ 3 回以内
フルピカフロアブル（アニリノピリミジン）	○	○	2,000～3,000 倍	収穫前日まで／ 4 回以内
ゲッター水和剤（ Ｎ－フェニルカーバメート＋MBC）	○		1,000～1,500 倍	収穫前日まで／ 5 回以内
		○	1,500 倍	収穫前日まで／ 3 回以内
ロブラール水和剤（ジカルボキシイミド）	○	○	1,000～1,500 倍	収穫前日まで／ 3 回以内
ベルクートフロアブル（グアニジン）	○		2,000～4,000 倍	収穫前日まで／ 3 回以内
		○	4,000 倍	収穫前日まで／ 2 回以内
エコショット　注 ）	○	○	1,000～2,000 倍	収穫前日まで／ －

注）エコショットは微生物農薬です。灰色かび病の発病前から散布することにより、防除効果が発揮されます。

※　上記の希釈散布剤以外に、**暖房機のダクト取り付け口付近から製剤をダクト内に直接投入し、暖房機を数時間以上稼動させることで灰色かび病を防除する微生物農薬（ボトキラー水和剤：発病前から散布）があります。**

農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。

※ＪＡ全農いばらきホームページでもご覧になれます。

JA全農いばらき
生産資材部　営農企画課
電話：029-291-1012　FAX：029-291-1040